

第5回神奈川県立県民ホール本館再整備基本構想策定委員会 議事録

日時：令和7年9月4日(木) 14:30～17:00

場所：大同生命横浜ビル 13階 会議室4

1 開会

○事務局

- ・会議を公開とし、傍聴者3名が入室
- ・事務連絡

○稲村委員長

- ・委員会成立の報告

2 議題 施設整備について

- ・資料2、3、4に基づき、事務局より説明
- ・佐藤委員、泉委員の事前聴取意見について事務局より説明

＜佐藤委員の意見＞

ホール1について、本格的なオペラ、バレエの実施ということであれば、案の内容をベースにしてもよいと思う。

ホール2について、K A A Tとのバランスをとることが重要。舞台芸術へ向けたものを考えるのがよいと思うが、この分野の知見を持っている委員が大勢いるので、この部分は議論にお任せする。ただし、強いて言うと、敷地に収まるのか気になる。

ギャラリーについて、ギャラリーのあり方をどのように融合させるのが重要なポイント。「プロフェッショナルの実現」と「県民の文化活動の支援」という方針にどのように答えていくのか。これまでの議論の内容や立地を考慮すると、ホール1と同様に、ギャラリーでも「プロフェッショナルの実現」が可能な仕様とすべき。

一般的な美術館の企画展示室を想定した規模・設備を設定することで、本格的な展覧会が実施できるギャラリーという位置づけを明確にするのがよい。

ギャラリーでも「県民の文化活動の支援」を行うが、それは大規模な面積が必要な団体などへの対応を行う場所とするのがよい。

1,200㎡を1つの空間にして遮音性能の高い壁で仕切ることによって小さくも貸せるようにすれば、大きな展示をする使い方ができるというメリットがある。一方で、最初か

ら部屋を分けて、天井高やサイズも多様にする事で、様々な団体が使えるようになるなど、それぞれメリットが考えられる。

県民ホールでは、1,200 m²という大規模な空間が必要な県民の利用を主に想定するのがよいのではないか。

展示室の天井高さの8 mはかなり高い。6 mでも十分と考えられる。有識者ヒアリングにもあるように、天井が高すぎると仮設壁などの設置、照明の調整、天井からの作品などの吊り込みといった作業の難易度が上がる。

消火設備についても、有識者ヒアリングにあるように、海外事例なども踏まえて、使用設備を決定するとよい。文化庁とも協議が必要かもしれない。八戸市美術館では、美術作品を展示するスペースはガス消火設備になっていて、展覧会に使う広いスペースはスプリンクラーになっている。

ギャラリーのあり方としては、オペラシティアートギャラリーや水戸芸術館現代美術ギャラリーのように、コレクションを前提としない、企画展を主体とした運営を行うのがよいのではないか。

＜泉委員の意見＞

ホール2について、県民の方々の音楽を中心とした利用を考えればB案がよいのではないか。多ジャンルが融合した公演が実施できるC案でもよいかと思う。ただ、パイプオルガンは残せるとよいと思う。できれば誰もが見たり、聴いたりできる場所に置けたらよいと思う。

車いす利用者のトイレについて、ベビーベッドと同じ部屋ではなく、別で作ってほしい。また、数もある程度確保してほしい。楽屋には必須で、練習室などの近くにも設置してほしい。お客様が使うスペースとは別で、出演者側のスペースにも設置してほしい。

建物の入り口は、車いすなどが通れることをスタンダードにしてほしい。これまでのように、車いすの人は向こうに回ってください、みたいなことが無いようにしてほしい。

○稲村委員長

資料3を中心に、施設整備について議論していきたい。

まずは、ホール1からご意見をいただきたい。これまで基本方針の議論をする中で、オペラ、バレエが実施できる多機能ホールという方向でおおよそ委員の方向が定まっていたと思う。改めてホール1の主要用途及び目的について、または客席や諸室、他の細かな点についてもご意見があればいただきたい。

○恵良委員

質問だが、専門家ヒアリングの意見のうち、これまでの議論の中で考慮していなかったことはあったか。

○事務局

ヒアリング内容は全てというわけではないが、要素として盛り込んでいると思う。ホール1については、基本的に盛り込んでいる。

○恵良委員

議論が後戻りしないように、指摘された意見をしっかりと盛り込んでいるか確認したかった。

もう一点、施設の面積について、新たに定められた福祉条例などを遵守すると、現行と同じ内容であっても新しい施設では面積が増えることになる。予算や容積率の関係もあるが、多少の面積の広がりは許容されると考えてよいか。

○事務局

基本構想では確定した面積ではなく、ある程度幅を持たせた形で記載をすることになると思われる。今は考えられる機能を全て盛り込んでいる。資料をご覧いただき、この部分は減らせるのではないか、という点があればご提案いただきたい。

○恵良委員

新たな福祉条例をはじめとして、バックヤードまで考慮すると、面積は今の県民ホールより必然的に増えるはずなので、そこは許容していただく必要があると思いお聞きした。

○稲村委員長

他に質問あればお伺いしたい。

○榊原特別委員

ホール1が9,000 m²と書いてあるが、現状のホールが9,000 m²ということか。

○事務局

現状ではなく新たにつくる施設のホール1のイメージを検討し9,000 m²となっている。現在の県民ホールの大ホールの面積ではない。

○榊原委員

恵良委員とも共通する意見だが、現状の客席の狭さを考えると、新たなホールは客

席だけでも今の1.5倍ほどの面積が必要になる。そのように必要な面積が大きくなることを考慮しておかないと、その分キャパシティが少なくなってしまうのではない。逆に、舞台と客席の面積を確保したために、舞台裏が狭くなってしまうということもあり得る。どう面積を算出されたのかが気にかかった。

もう一点、以前から「立ち見100～200程度」と書いてあるが、現状では消防法により劇場、ホールで立見が可能なのはほとんど無いと思うが、立見とは何を指しているのか説明してほしい。

○事務局

立ち見席について、完全に立って観るものではなく、後ろのほうに座席はあるが観えにくい場合はその場で立って観られるものを想定している。

○榊原委員

それは一般的にいう見切れ席ではないか。立ち見席と見切れ席はまったく違う。立ち見をここまで多く入れるのはできないのではないかと考えていたので、そのような想定であれば、見切れる客席が全体の5～10%という書き方がよいのではないかと思った。

○石田委員

ホール1について、舞台面、主舞台の広さ、オーケストラピットの広さは、どのくらいの大きさを想定して9,000㎡としているのか。

○事務局

面積の根拠だが、客席は2,400席×0.85㎡を見込んでおり、現代の体格のお客様でも入れるスペースと考えている。オーケストラピットはワーグナーピットを想定するかあるが、試算ではオーケストラ迫りとして150㎡を見込んでおり、かなり大きなスペースを想定している。建築では通り芯で見ていく（壁や柱の厚みを考慮していない）のが基準になるので、面積は少し多めに見込んでいる。150㎡のオーケストラピットを持つ劇場は国内ではない。そのくらい大きなスペースを見込んでいる。（補足：舞台はホール1の主舞台でプロセニアムの幅20m×奥行き22m×プロセニアムの高さ9～14mを想定）

○榊原委員

オーケストラピットは非常に大きな面積を占める。ホール2の800席、600席のそれぞれにオーケストラピットと書かれているが、これは下に掘ったオーケストラピットなのか、それとも客席を取り除くオーケストラピットを想定されているのか。

○事務局

オーケストラピットは前舞台としても利用でき、また客席ワゴンに乗せているので、客席としても利用できる。また演奏面としても利用できることを想定している。

○榊原委員

それならば、オーケストラピットを設置する場合は客席数が減るので、「オーケストラピット使用の場合は客席 450 席」などと表記したほうがよいのではないかと。600 席のホールから 150 席が使えなくなると仕様がかなり違ったものになるので、みなさんが分かりやすい表記にした方がよいのではないかと思います。

○宮崎委員

ホール 1 に「主に商業利用とする」と書いてあるが、これの意図するところは何か。ほとんどを商業利用に貸し出すということを想定しているのか。

○事務局

商業利用＝全て貸館というわけではない。前回の委員会にて「県民利用と商業利用を明確にした方がよい」とのご意見もあったので、これまでにやってきた吹奏楽や合唱などの県大会や全国大会などの利用も想定しているが、利用としては主に商業利用ということに記載させていただいた。

○榊原委員

「商業」と書くと、相対するのが「芸術」という印象を与えるのではないかと。「商業音楽」に対して「芸術音楽」があるように、このような書き方をすると見え方が変わってくる。「芸能」と「芸術」も難しい部分があるが、この部分については書き方を変えた方がよいと思う。

○事務局

意図がわかりやすくなるよう修正する。

○石田委員

ホール 1、2 に共通して「音響反射板を備える」と書いてある。これは可動式の音響反射板を設置するということでのよいのか。基本は劇場であり、オーケストラやコンサートで美術や照明などを吊りこんだりしないものに関しては、可動式の音響反射板が設置可能ということでのよいのか。

○事務局

音響反射板は吊り込み型など動かせるものを想定して、利用する時のみ設置することを想定している。

○稲村委員長

ホール1については、本格的なオペラ、バレエができる多機能ホールとして多様な使い方をしていくという方向性で進めていく。商業利用と言う文言は再考いただきたい。ということで、各委員とも認識に大きなずれは無いかな。

○委員各位

(異議なし)

○稲村委員長

それではホール1については文言や誤読を防ぐため、指摘があった部分について詳細を加筆しながら基本構想をまとめていただければと思う。

続いてホール2について議論をしたい。資料では4パターンの想定が示されている。ホール1とは異なり、何の目的でこのホールを整備するかが重要な議論になる。また、パイプオルガンについても今後どうしていくか議論を深める必要がある。ご質問があれば先にお伺いしたい。

前回の委員会やヒアリングの中で、いくつかご意見をいただいている。例えば、何のために整備するのかに対して、ホール機能と創造機能があるというご意見もあった。パイプオルガンについても、残さないという意見は無かったと思うが、残し方については議論があった。まずは、ホール2をどういう目的で整備するのかについて意見をいただきたい。

これまでの議論の流れとしては、ホール1に比べてホール2では県民の利用が想定されるべきという意見が出てきている。

○石田委員

質問だが、ホール2のC案のスタジオは、K A A Tのスタジオのようなものを想定されているのか。特色の違いなどがあるか説明いただきたい。

○事務局

K A A Tの大スタジオは240席程度なので規模が異なる。構造的には同じようなものを想定している。

○稲村委員長

前回、小林委員の意見書にて、「何の目的のために整備するのが重要」というご意見があった。また、「優先順位については、ホール機能と創造機能ではないか」というご意見があった。補足でご説明いただけることがあればお願いしたい。

○小林委員

大型の舞台芸術を上演するようなホール1については方向性が定まったようだが、ホール2にあたる2つめのホールは、他の地域の文化ホールや総合文化施設では、県民が使いやすいタイプのものを作っているところが多い。そういった理由で、県民中心のものがよいと言ったと思う。

県民が行う文化芸術では、本当に色々な用途でステージが使われる。演劇、ダンス、伝統芸能など多くのジャンルに使われることを考えると、多目的に利用できるタイプのホールにした方がよいのではないかと思う。多目的というと専門の方々は嫌がるかもしれないが、今は多目的ホールの機能も相当上がっている。

パイプオルガンについては、以前にヒアリングかアンケートかで、「サン＝サーンスの作品を聴きたい」というご意見があったことは把握している。ただ、この周辺ではみなとみらいホールに本格的なパイプオルガンがあり、コンサートができる。そういった周辺の状況や、県民ホールのパイプオルガンが、大規模なオーケストラに合うものではないことを考えると、わざわざこのために小ホールをつくるのはどうかと思った。

パイプオルガンを残したい気持ちや愛着があることを受けて、どう残していくかはまた別の問題として考えなければならないが、ホールについては県民に寄り添って考えてもよいと思う。

○稲村委員長

小林委員の意見と同じく、私も県民利用を中心に考えていくのがよいのではないかと思うところだが、資料には、ホール2について4つの案が挙げられている。AとBは客席数の違い。Cのスタジオについては、舞台芸術の中でも演劇やダンスの想定が濃い形になっていると思う。Dはパイプオルガンの整備を前提としている。この4案について、規模やどんなことを想定してつくるべきかなど、ご意見をいただきたい。

○恵良委員

前回C案のような創造的なスペースについて発言した。創造性というものに積極的に取り組むならば、今の技術的な進歩や、アートの広がりもあるので、創造的なスペースを持つという考え方もあるのではないかと思います。その理由は、ギャラリースペースの役割が多目的で曖昧であり、不明快に思えたためである。それならば、本当に創造性に積極的に取り組んでいくためには、この立地にC案のようなスタ

ジオをつくることは、チャレンジとして可能性があるのではないかという趣旨で申し上げた。

ただ、ギャラリーの目的として、アート、美術ということを明確にしていくならば、C案を勧めることはない。創造性を出すことについては、K A A Tでパフォーミングアーツを行うといった方法も考えられる。新しいギャラリーでアート、美術系のものを行うという明確なコンセプトを持つのであれば、それが尊重されるべきであり、ギャラリーの性能を下げるのはよくない。

天井高などの仕様は今後深めていけばよく、もし私の以前の発言を考慮してC案が出されているのであれば、今回ギャラリー部分が強化されているので、私としては取り下げてよいと思っている。

○稲村委員長

創造性の観点からのご意見をいただいた。ギャラリースペースとの整合性を考える必要はあるが、もしかしたらホール2でも創造性を強化していくべきというご意見があるかもしれない。恵良委員の意見に対して補足や違う視点からのご意見があればお願いする。

○榊原委員

近隣のホールを考えると、約1,000席の神奈川県立音楽堂がある。また、440席のみなとみらいホールの小ホール、東神奈川に行けば約300席のかなつくホールがあり、横浜が多くで300～400席規模のホールを整備していることを考えると、それらとの競合は考えなければならない。

一方でどこまで多目的に使うのかという問題がある。落語からクラシック、演劇、伝統芸能まで使うのか。何を目的にするかによりキャパシティと空間、舞台機能、舞台機構の考え方が変わる。ロールバックチェアを備えた時点で音楽専用ホールではなく、多目的ホールということになるが、ロールバックを格納して利用するところはほとんどなく、出しっぱなしになっているホールが多い。

恵良委員のご意見には賛成で、C案は取ってしまってもよいと思う。

○宮崎委員

A～Dの各案を見ると、A案やB案は無難だと感じる。

C案は多ジャンルが融合など面白そうだと思うが、椅子を外してフラットにして色々とできると言っても、650席の規模でブラックボックスとなると非常に大きな空間となる。日頃劇場運営をしている身として利用者視点や運営の現実を考えると、県民や市民団体が簡単に使える空間ではないと思う。C案にしさえすれば、多ジャンルが融合する使い方ができるというわけではない。

県民ホールが自主的に空間を駆使して、年中色々なことを行うならばよい案かもしれないが、主に県民の方が使うということであれば考えた方がよいかと思う。

むしろ、各ホールのリハーサル室や練習室という空間が面積に算定されているので、多ジャンルの融合については、ギャラリーを含めそういう空間を発展させて考えることで、施設全体の中で実現させていくことができるのではないかな。

A案、B案の違いは客席数だが、委員会の最初の頃に「県民ホールには中規模のホールがないので、やむを得ず1,000人以下の催しでも2,500席の大ホールを使っていた」という話があった。近隣に中規模のホールが少ないのであれば、ここで整備してもよいと思う。生音を客席にしっかりと届けたいという需要が予測されるが、それは音響反射板を備えていれば可能である。演劇にもダンスにも使えるホールというと、よくあるものとして見えるかもしれないが、ホール1と合わせて展開することで、県民ホールが新たな分野に踏み出せる機能を持つことに繋がると思う。

D案のパイプオルガンについては前回も申し上げたが、パイプオルガンを設置することによりホール2の設計が制限を受けることを考えると、歴史的な資産の継承としては、パイプオルガン専用のホールをつくるのではなく、別の方向を検討してはどうか。

そうすると最初に無難と言ったA案、B案が、戦略的かつ持続可能であり、50年後の将来に繋がっていく案になるのではないかなと思う。

○稲村委員長

宮崎委員からC案は無さそうだという意見があった。C案については同意する方が少ないように思うが、逆にC案がよいという意見はあるか。無ければA案、B案、D案を中心に議論を深めていきたい。

○恵良委員

資料P20のワードクラウドの分析を見ると、「県民」の期待するものとして様々な要素が入っている。これによると公会堂や多目的空間ではなく、音楽というテーマに対して、ちゃんと音が響くなど、ある程度のレベルのものが求められている。

また県民ホールから10km圏内にそういう施設が意外と無い。そのようなポジションを考えれば、ワールドクラスと比べても品質がしっかりと担保されたものを提供することが明確な判断基準になると思う。

また、P18のワードクラウド分析に大きくパイプオルガンとあるのは、調査対象に占めるオルガンファンの方々の比率との関係も推測される。ただし、パイプオルガンが横浜市やその周辺のどこのホールに整備されているかという情報を踏まえた上でのアンケートというわけではないだろう。横浜にはオルガン文化があるので、それをどう捉えるかは課題だが、県民ホールのパイプオルガンをどうするか、このアンケート

分析のみをもって考えることはできないと思う。

パイプオルガンの答えは出ていないが、ホール2について、パイプオルガンの視点ではなく、県民が主役になるホールという切り口で考えたときには、A案かB案になると思う。

○稲村委員長

A案、B案が妥当という意見が多い。ジャンルについては、音楽についての意見が出ているが、音楽としての性格を強めていくことをホール2で想定していくのか。それ以外でもご意見があればお伺いしたい。

○恵良委員

補足だが、位置付けが明快になると、次にブランド力が重要になる。ブランドとは、作る側が客に何を提供できるか、何を約束できるかということ。県民ホールが「みなさんが主役になって、トップレベルの音楽ができる環境を提供する」と約束し、結果としてお客様からの県民ホールに対する信頼が生まれ、そこで初めてブランドが成立する。その信頼を維持することが重要という視点で判断する考え方もある。

私はまちブランドに長く関わってきたため、信頼性こそがブランドそのものだと思っている。

○稲村委員長

音楽についてのブランドの確立、ポジショニングについてご意見をいただいた。他に意見はあるか。

○榊原委員

以前にも申し上げたが、現状のパイプオルガンは、A案 800 席、B案 600 席の空間ではおそらくそぐわないものになる。小林委員からは周辺の他のホールにもパイプオルガンは備えられているので、ホール2をオルガンありきで考えなくてもよいのではないかという意見があったが、パイプオルガンは容積に対して作るものなので、サイズが違えば全く別のものになる。案の中で今のパイプオルガンが設置可能なのは、D案しか無い。D案であつても空間が大きくなることを考えると、今までのようにいけるかどうかは設計次第になる。パイプオルガンを考えるならば、空間とパイプオルガンの関係を考えることが必要になる。

○小林委員

基本的にブランドを明確にするということは大事だと思うが、「レベルの高い県民の芸術活動」というのは音楽がメインなのか。他の地域だと伝統芸能が前面に出ること

もあるし、今だとダンスが出てくることもある。オペラ、バレエができるホールにするというだけでも音楽に特化してくるところがあると思うが、県民利用のホール2も音楽利用を明確に出す必要があるのか。私は県民ではないので「こうすべきだ」とまでは言えないのでお聞きしたい。

○事務局

県民利用が音楽に特化しているという想定はしていない。案に記載しているとおり演劇、ダンス、伝統芸能など多様な舞台芸術を含めた文化活動を想定している。神奈川県民の文化と言えば音楽、という想定はしていない。

○恵良委員

先ほど音楽を例に発言をしたところだが、案にも演劇やダンス、伝統芸能というキーワードが書かれており、私としてはそれに対して依存は無いので音楽特化については訂正する。

○稲村委員長

これまでの議論を整理すると、パイプオルガンを残さないという意見はなく、残すための選択肢として3パターン程度あると考えられる。一つはD案のようなパイプオルガンに合わせたホールを整備するパターン、もう一つはパブリックスペースに設置するパターン、三つ目が県民ホールではない他の施設と連携しながら活用を探っていくパターンがある。

その中でパイプオルガンをホール2に設置するならば、オルガン文化を育むというポリシーを県民ホールの中に据えることになり、ホールの未来やブランディングにも繋がるため、強いアイデンティティになる。一方で、パブリックスペースへの設置であれば、県民ホールの文化的かつ歴史的な価値の継承や象徴に繋がる。

この中でどうしていくか、この3つのパターンに限らずとも方向性についてご意見をいただきたい。

○笹井委員

前回の委員会で、公立施設で初めて設置したオルガンを継承することは、これまでの県民ホールの取組の継承やブランドに繋がるので大事だと思っていると申し上げた。しかし、D案のように必ずしもパイプオルガンの規模にあったホールを設置すべきとは考えておらず、よい形のストーリーができ、新しいホールに引き継げるとよいと思う。

水戸芸術館ではパブリックスペースにパイプオルガンを設置している。多くの人がある場所にあり、無料のコンサートなどで目にすることができるというメリットがあ

る。ただし、維持管理にお金と手間がかかるというデメリットもあるので、一概にそれがいいとは言いきれない。パイプオルガンについて、検討の材料として、残す場合のコストを踏まえた上でどうするか、この場ではないかもしれないが検討する必要があると思う。

閉館後にパイプオルガンの手入れがされないまま傷んでしまい、いつの間にか撤去されたという悲しい例があったかと思うが、そうならないよう、今後どうするかということ示さなければならないと思う。

○稲村委員長

笹井委員から、パイプオルガンは必ずしも専用ホールへの設置というわけではないが、引き継いでいくことが重要であり、専門家にあっていただきながらコスト面を含め検討していくことが必要だという意見をいただいた。

○三沢委員

パイプオルガンを移設し、文化を継承し象徴とするのはよいと思った。パイプオルガンの来歴を教えてほしい。ホールではなく公共の場所に設置することで、環境が変わり音の味わい方や新しいことが感じられるのか。大事なのならそのように使ってもよいのではないかと思った。

○事務局

パイプオルガンは、公立のホールとして全国で一番古いものと言われている。ただし教会などを含めると一番古いというわけではない。ドイツ製のもので、県民ホールの小ホールの空間に合うように作られている。

○稲村委員長

パブリックスペースでの活用について意見が出ているが、他の活用方法などのご提案はあるか。

ここが、ホール2の方向性を決める上で重要なポイントになると考えており、できれば今日の委員会で合意までもって行ければと思っているので、少数意見でも是非お聞きしたい。

○雲龍委員

以前パイプオルガンをレガシーとして残すという話をさせていただいたが、どんな形であれ残すのであれば、必ずしもホール2に設置しなくてもよいと思う。

ホール2については「県民のため」というキーワードが出ているので、県民が使いやすいホールであることを考えると、県民利用にふさわしいキャパシティを選べばよ

いのではないか。それが 800 席なのか 600 席なのか 400 席なのかは判断しかねるが、どのホールでも舞台面の大きさはそこまで変わらないと思う。予算とスペースの制約で 400 席になるかもしれないし、800 席まで取れるかもしれないという話なのではないか。音楽専用ホールでないならば舞台袖はあった方がよいと思うので、A 案か B 案で制約条件を考慮しつつ何席にするかを考えればよいのではないか。

○長門委員

パイプオルガンについては技術的な問題や運営上の問題があると思うが、可能であるならばパブリックスペースに設置し、歴史の継承とブランドの一つとして活用することもできるのではないか。ただ技術的なことについては分かりかねるので、もし設置ができないということであれば考え方を変える必要がある。設置が難しく他の場所に持ってくならば方向性を明確に決めることが求められる。いつの間にか無くなっているということは避けたいと思う。

○稲村委員長

パブリックスペースへの設置について、実現可能性がどこまであるのかが重要なポイントだと思う。実際にはできない可能性もあるかもしれない。事務局には可能であれば、専門家も入れて、移設した時の実現可能性について委員会と同時並行で検討を進めていただければと思う。

○吉野委員

パイプオルガンをパブリックスペースに移設するという話だが、パブリックスペースにレガシーとして残るのは好ましいと思うが、それが飾り物ではなく、生きたものとして残ってほしいと思う。水戸芸術館のパブリックスペースのパイプオルガンが参考になるかと思う。エントランスの扉を閉めることで遮断された空間になり、コンサートができる。事例などを踏まえて解像度を上げる必要があるので、他にもパブリックスペースにある事例があれば事務局でまとめていただければと思う。

○稲村委員長

パイプオルガンについては、概ねパブリックスペースへの設置を検討するというご意見が多いので、残すということを前提としつつ、県民ホールの文化的歴史的遺産として、パブリックスペースに残す方向で検討するというのを、この委員会の合意としてよいか。

○委員各位

(異議なし)

○稲村委員長

それでは、A案、B案についてさらに深い議論をしていきたいが、基本構想では予算的なこともあり、ある程度の幅で考えていくとのことなので、600席か800席かを決めるというよりは、それぞれの場合の使い方についてのご意見をいただきたい。

○榊原委員

参考資料ではD案の音楽専用ホールでも2,260 m²が必要と示されていて、現状の小ホールよりも広いスペースになっている。A案の800席のホールではホール1の半分もの面積を占めている。そうすると、今までにあった県民ホールよりも大変大きな施設になると思われる。

そこまでしてホール2にスペースを使う必要があるのか。ホール1が商用利用も含めて使うホールだということへのアンチテーゼのようにホール2をつくらねばならないということで大きさを稼いでしまうのは危険ではないかと思う。現実的には、ホール2として大きなものを作ったら、他のギャラリーやバックヤードなどの機能がどれだけつくれるのだろうかという疑問に思う。

ホール1と2は、しっかりとしたコンセプトとともに、容積、面積もかなり大きな違いをもって整備した方がよいのではないか。逆に600席、800席が必要という理由を聞きたい。

また、演劇、ダンスまでいいが、伝統芸能までを含めると、800席の空間で落語や和太鼓を行うのは無理ではないか。加えてクラシック音楽もできる音響のホールで全ての伝統芸能をやるのは無理だと思う。県民のために可能性を切ることはできないということだが、使い道を狭めて考えないと最終的にホール1が困ることになるのではないかと懸念する。

○石田委員

既存の他のホールの規模感をみなさんに共有する。びわ湖ホールは1848席、804席、323席、東京文化会館が2317席、653席。新国立劇場が1814席、1038席、468席ということをお願いしたい。

次に、びわ湖ホールでは、大ホールと中ホールで同時にコンサートが行われる時には、エントランスからの広いアプローチがかなりの人で溢れることになる。そういった人の動線や規模感も考えていかなくてはいけないと思う。

○稲村委員長

委員会の初期の頃、1,000席ぐらいという想定があったと思うが、なぜこの席数に設定しているのかを事務局に説明いただきたい。

○事務局

これまでの県民ホールの大ホールの利用状況を見ると、1,000人未満の県民利用が見受けられた。1,000人未満の利用の受け皿となるようなホールがあれば、大ホールを2,000人以上のキャパシティが本当に必要な公演に効率的に使うことができる。また、県民利用として800席から1,000席規模のニーズを効率的に吸収することもできる。そのような想定で席数の提案をさせていただいた。ただ、ホール1を2,400席とすると、1,000席のホール2をつくることは現実的に敷地面積の関係で難しいという試算があったので、今回600席から800席の案をつくった。

○土田委員

私は、前回も言ったがホール2は無くてもよいと思っている。ホール2がなくて困る方はどのくらいいるのか。ホール1のような2,400席の規模は県内に県民ホール以外無いが、ホール2の規模は例えば関内ホールや神奈川県立音楽堂などがある。代替施設があるならば、ここに整備する必要は無いのではないかと思います。その理由として一番心配しているのは整備費の問題である。そこまで大きな施設にして大丈夫なのか。現在、資材や建設費が高騰して下がる要素が全く無い中で、計画が途中で止まっているホールもあり、そういったホールの二の舞になるのではないかと。そうならないために、絶対に必要なものとしてホール1だけを整備することでよいのではないかと思います。

○稲村委員長

重要な意見をおっしゃっていただいた。ホール2自体が必要か不要かはこの場では決めるにくいところがあるが、土田委員の整備費に関する意見は、他の機能を検討する際にも重要な要素として事務局には受け止めていただければと思う。

(5分休憩)

○稲村委員長

後半は、ギャラリーなどの他の機能や全体を振り返りながらご意見をいただきたい。

ギャラリーについては美術品の巡回展にも対応できるギャラリー空間として500㎡、400㎡、300㎡という案が上がっているが、こちらについてご意見をお願いしたい。

○長門委員

佐藤委員から意見をいただいている内容にも関係するが、合計 1,200 m²の展示室はよいと思う。これを前提として話す、案の中に保存庫や収蔵庫の記載が無いのが気になる。巡回展となるとクレート（ケース）や輸送のための箱を置く場所も必要になる。また、展示品はダイレクトにギャラリーに入れるわけではなく、一時保管庫や、場合によってはシーズニングをすることもある。つまり、巡回展を受け入れる場合、展示室とほぼ同じコンディションで、しかるべき広さの保管庫が必要となる。

1,200 m²で想定するのがよいのではないかと、という佐藤委員の意見には私も同意する。現在の県美術展や独自の企画展を行うには、それぐらいの広さが必要であり、場合によって 300 m²などの部屋に分けるなどができればと思う。

収蔵庫については運営の仕方も関わってくる。現在、既にギャラリーで所蔵している作品がありながら収蔵庫の記載が無いということは、どういうことなのか分からないが、コレクションを持ち、それらも展示する運営とするのか、ギャラリーとして収蔵を持たずに展示のみの運営を行うのか。企画展を主体とするならば誰が企画するのか、加えて、持続可能な運営や人材育成が基本方針で掲げられていることもあるので、運営の仕方が大事なポイントになる。

佐藤委員の意見には「搬入は 4 t トラックのみでよい他館を参考に検討する必要がある」とある。大きければ大きい方がよいが、面積の問題もあるだろう。ただし、美術品の搬出入では完全にトラックを建物内に入れる想定をしておく必要がある。またトラックも一般の 4 t トラックとは違うので、大きさを想定しておく必要がある。

資料ではギャラリー機能 1,910 m²のうち 1,200 m²が展示室になっている。作品を搬出入するには、通路等を広くとらなければならないのでそれなりの面積が必要となるが、その面積が共有エリアの方に含まれていればよいが、残りのギャラリー機能 700 m²に含まれているならば足りないと思われる。

天井高についてだが、神奈川県立近代美術館葉山館が一番高く 6 m になっており、5.5 m と 3.8 m の 3 パターンの高さがある。5 m を超える場合は高所作業車が無いと照明等の作業ができないので一般の利用者には使いこなせない。作業するためには技術の人がいなければならないという運営になる。天井高 8 m となるとより大変になる。吹き抜けなどはあってもよく、むしろ、様々な高さの天井高があった方が、変化があつて面白いかもしれないが、6 m ～ 8 m とすると使いこなせないかもしれないしこのような書き方は誤解に繋がるかもしれない。以前に空間に特徴があるからこそ面白くなるというご意見があつたと思うので、全部を均等にする必要は無いと思うが、8 m という天井高は、8 m × 1,200 m²だと広くてよいという意見もあるかもしれないが、使いにくいと思う。

○稲村委員長

ギャラリーが合計 1,200 m²になるが資料には 1,910 m²となっているので、その中で

収蔵庫などの諸室について見ている部分もあるのだと思う。

○長門委員

残りの 710 m²で収蔵庫や通路等を想定していると思うが、それで足りるかどうか。通路、トラックヤードまで含まれているとすると面積が足りないと思う。

また、以前に防音になっているとよいという話があったと思うが、そのあたりは仕様の問題になると思う。

佐藤委員が消火設備についても触れている。有識者の意見でも海外ではスプリンクラーの事例があるということなので、この点については文化庁に確認が必要な部分だと思う。現状の日本では、どこも展示室の消火設備はガスで作られていると思う。今後どういう方向にいくかも含め確認をした方がよい。一概にスプリンクラーで大丈夫かということ、今の日本の現状では美術品の展示が難しいとなることがある。

○稲村委員長

ギャラリーについて、ご意見や気を付けたほうがよい点、ご指摘などがあれば続けてお伺いしたい。

○三沢委員

長門委員のご意見と重複する部分があるが、展示室は充実していると思うがバックヤードが気にかかる。4 t ロングの箱車が 1 台入れる空間をとるということだと思うが、荷解きをしたり違うトラックが入ってくることを考えると、ドリームプランにはなるが、4 t ロングが 2 台入れる場所があれば充実する。そこからプラットフォームがあり、大きなシャッターをくぐると廊下に繋がり、展示室まで直線で移動できるとパーフェクト。美術展の中には 4 t ロングのトラックを 10 台程度使うときもある。それらのトラックが待機できるピットがあるとよいと思う。いつも使うわけでないで、その時だけ駐車場の一部を閉鎖することでトラックを置ければよい。そのぐらいのことができれば、大規模な展覧会の実施が可能かと思う。

天井高は、6 m の天井高があれば相当空間が広がるのでよいが、高所作業車が必要になるので、プロが立ち会う必要があり、一般の人には作業させられない。葉山館は 3.8 m の天井高が一番低い、それでもそれなりの天井高がある感覚になる。一番高いところでも 6 m とし、部屋によって高さを変えながら設定すればよいと思う

一般的な学校の美術展であるとか団体の美術展であれば、設営は脚立で登れるくらいが作業しやすい。作家本人が展示できる範囲の空間があってもよいのではないかな。それでも展示によってはしっかりできるので、空間の高さを変えた方が、全体を一つの展覧会で使うときにも起伏が出て有効なのではないか。

○稲村委員長

展示スペース、バックヤード、天井高についてご意見が出ているが、重ねてご意見はあるか。

○長門委員

床の話にも触れておきたい。三沢委員からあったように、搬入から展示室までフラットで、曲がることなく行けることも重要。加えて、床の強度や耐震などもあるので固定がどれだけできるかも考慮する必要がある。間仕切る場合でもその度に仮設の壁を作ると費用がかかるので、間仕切り壁をどこかに格納しておき、使う時に壁面化して固定するという工夫も必要。そうすると壁を格納する場所も必要となる。そういったことも考えると、1,200 m²の展示室に対してバックヤード700 m²は小さいと思う。

床だが、当館では平米1tの耐荷重に対応している。また作品を天井から吊れることも必要。空間だけでなくそういった部分も設備として対応しておく必要がある。

○稲村委員長

今の意見など、今後詳細を詰めていくときに事務局には参考にしてほしい。

次に練習室、製作工房と続けていきたい。練習室は多様な用途に利用できる多機能空間として、アトリエとしても会議室、楽屋としても使えるものが、大270 m²×2室、中135 m²×6室が見込まれているがご意見はあるか。

○小林委員

確認させていただきたいが、新しい県民ホールにはオペラやバレエのレジデントを作る予定があるのか。

なぜかという、最初に資料を見たときに製作工房のところに驚いた。こういった工房があるのは海外のオペラ劇場の仕様だと思った。海外の劇場だとカンパニーがいてバックヤードがあり、オーケストラもいるのが基本。そういう形を目指していくのかを確認したい。そういう形なのであれば、必要になってくるとは思うが。

○稲村委員長

レジデントカンパニーを想定しているということは聞いてないが、事務局から補足をいただきたい。

○事務局

具体的にカンパニーを置くことについては決めていないが、自主事業も含め、様々なことを行うときに製作などができる機能を持つ部屋を用意した方がよいと考え、練習室、製作工房、管理機能に含めている。

○宮崎委員

前回委員会でも質問したレジデントカンパニーが資料に書いているが、レジデントカンパニーと言わないほうが正しいのではないかと思う。前の事務局の説明の感じだと、ビジティングカンパニーとか、ツアーカンパニーなどの意味合いか。レジデントカンパニーというとホールと運命を共にしているという意味に捉えられるがそうではないようなので、読む人に誤解が無いように言葉を確認したほうがよいと思う。

○稲村委員長

練習室と製作工房についてもまとめてご意見をいただけたらと思う。

○雲龍委員

前に申し上げたことと重複するが、製作工房と練習室は必要最小限でよいと思う。手直しする程度のものがあればよいのではないか。製作工房をしっかりと作ろうと思うとそれなりの設備や換気などが必要になる。そういったものを都会に整備する必要はないと思う。練習室は一般の県民の方の利用があるかもしれないが、製作工房は必要最小限にすることを薦めたい。

○榊原委員

大がかりなバレエ、オペラまた合唱を含むオーケストラなどの公演を考えると、楽屋が足りなくなることが想定されるので、練習室の利便性と動線の良さを考えて作ることが必要になる。また運営の問題として、無駄を無くすのであれば練習室を常時貸すなど、それなりに動かすことが必要となる。

○稲村委員長

楽屋、練習室、動線の問題、運営の話については次回も出てくるが、留意しながら検討していきたい。

○恵良委員

ギャラリー関係について、コレクションがあるのかどうかお伺いしたい。

○事務局

コレクションではないが、寄贈いただいた作品など、県民ホールで保管しているものがある。

○恵良委員

新しいホールでも保管するのか。

○事務局

新しい県民ホールで常時展示するかは未定だが、現時点では保管しているものを廃棄する予定は無い。

○恵良委員

現行ホールで行っている県民や高校生の美術展もここで対応するのか。

○事務局

これまでに県民ホールが、県美展や高美展で果たしてきた役割はご意見として聞いているので、そういう展覧会を含め利用できるように考えていきたい。

また補足だが、製作工房について、大掛かりなものをイメージされるかもしれないが小さい作業スペースを想定している。

○稲村委員長

次に交流機能についてお伺いしたい。「誰でも自由に出入りでき、文化芸術と新たに出会える」とのことだが、基本方針では一番上に書かれていることである。エントランスはホールの顔になる部分であり、これまでも意見をいただいているが、イメージが重要だと思うので、こういう空間であるとよいのではないかというご意見があればいただきたい。

○恵良委員

交流部分は建物内で想定すると思うが、動線や空間の使い方が非常に多様になるので、次のステップで様々な検討をした方がよいと思う。

バリアフリーは当然だが、その空間がどっちを見ているか、外光をどのように取り込むかも色々な問題があり、エネルギーコストにも絡んでくる。また、高さをどうするかなども重要な検討事項となる。ここに書いてある機能をゾーニングして割り付けるだけでは完成しない。特に動線が重要になるのでピーク時の動線の処理と滞留スペース、また用途としてもパーティをやるかどうかなど、色々なことがあるのでぜひ深い検討をしていただきたい。

また、私の専門が都市デザインや都市計画なので、外構も含めたアーバンデザイン、ランドスケープデザインを意識した方が価値が増すと思う。この施設がこのエリアの中核的な役割をにない、まちづくりの中で地域のブランディングのリーダーシップをとる可能性がある。そういうことを含めて考えると、まちとの関係を整理しておく必要がある。最大の課題は、物流動線をどうするかになる。

県民ホールと山下公園との関係では、ホワイエから見て公園がどのように見えるか。道路と同じレベルのフラットなつくり方では魅力が出るかは疑問に思う。今も階段状になっているが、建物1階の基準高があって、そのレベルからの目線で公園が綺麗に見えるかどうか。この辺りのデザインで大きくイメージが変わる。そのため、特に眺望階のレベルの設定や植栽の作り方、また、今は大きな彫刻が残っているがアートをどうするかも考えておいた方がよい。

山下公園通りの景観はホテルや施設もあり、通りに沿って歩く価値が高いため、歩道状空地、広場、賑わい機能をどこに配置するのも検討が必要。通り沿いなのかアトリウムや交流機能と繋げるか、上階層のレベルでつくるのかなど色々と検討することがある。

県民ホールの広場は、産業貿易センターの広場と同時期にペア広場として設計されていると思うが、内陸から海に向かう新しいゲートゾーンと捉えるかは、まちの価値や施設の価値にとって重要となろう。どこかのタイミングでしっかり議論いただきたい。

裏側の水町通りが物流動線をどう整理するかの最大の課題になるような気がする。歴史的に水町通りは、この山下エリアの都市の軸線だった場所になる。港の見える丘公園から降りてきた軸として、水町通りがメインストリートになっていた歴史があるので、車や歩行者動線をどう整理するかが行政協議のポイントになるのではないかな。うまい解き方を考えて行政協議をスムーズに進めるように、前広に都市計画視点の整理はした方がよいと感じる。

ブランドについて言うと、山下公園通りと複合的にポテンシャルを上げたほうが得策になる。公園通り沿いを歩く人が立ち寄る場所やその存在価値を知る場所として、どう交流ゾーンを関係づけて機能を配置するかは、最初に計画的に議論した方が、ブランニングがスムーズになる。

また、防災性能の強化も重要で、災害時にホワイエなどどこまでのスペースを提供するかを検討しておく必要がある。セキュリティレベルの設定にも繋がってくる問題であり、防災性能をどう受け止めるかは都市計画協議のポイントにもなるので、これらを念頭におき整理をした上で実際の設計に入らないと後戻りになってしまう。経験的にはできるだけ早く捌いたほうがスムーズに行く。

交流機能については、施設の外との関係でどのように価値ある空間にしていくかという視点をもつだけで違ってくると思う。あそこに行けば居場所になるとか、様々な芸術的なことが分かるとか、広い視点で俯瞰的に見ながら進められるとよいと思う。

○石田委員

交流機能について、恵良委員がおっしゃったように県民ホールから山下公園を望む景色は素晴らしく、その先の港に大型客船が停泊すると、新聞社が県民ホールからの

写真を撮り来るとも聞いたことがある。そのくらい県民ホールは展望に最適な場所なので、そのことを今後も重要な視点として活かしていただきたい。

情報コーナー、インフォメーション、展示スペースは非常に重要だが、もっと特徴を持って整備することができると思う。普通にチラシが置いてあって案内の方がいるということは想定できるが、「劇場ってこういうことやっている」ともっとアピールする場所にできるのではないか。

ロンドンのナショナルシアターがリノベーションしたときに、「劇場だが教育機能も持っている」ということをアピールして、政府から金銭的な支援を得たという事例がある。小学生や中学生が社会科見学に来た際に製作工房を上から見られるようなブリッジを作り、そのブリッジには触れることができる小道具が展示してあるなど、見られる、触れるスペースを作り、子どもを呼び込む機能を整備した。

そのくらい踏み込んで、劇場に人がもっと来られるような仕組みを作れないかと考えた。見学後に山下公園でお弁当を食べてもよいと思う。県民ホール周辺一帯で子ども達の教育、あるいは思い出が作られ、将来大人になって劇場に戻ってくる。そういうことを考えた時に、単なる情報コーナー、インフォメーション、展示スペースではなく、もう一歩先の発想を付与できないかと強く思っている。教育機能をここに付けることを提案したい。

○恵良委員

ここ 10 年程の傾向として、企業が本社ビルやオフィスを作る際、企業コンセプトを建物の外観やエントランス、ロビー空間でどう表現するかが重要になっている。例えば、そこで自社の製品や、環境についてどう考えているかなどをプレゼンテーションしていく方向にある。そこで働く人のモチベーションにも繋がるので、その空間の作り方が非常に重要になる。ビルの価値を上げるために、そういった空間で企業コンセプトや中にいる人たちが何をやっているかを表現することが重要だという考え方は、今世紀に入りヨーロッパを中心にはっきり表れている。

そのような認識を持ちつつ検討を進めることで、施設がより魅力的なものとなり、あそこに入ってみたいと思ってもらえる空間になってくれたら素晴らしいと思う。

○稲村委員長

事務局に確認したい。石田委員のご意見は運営とも関わってくるかと思うが、それについてはまた議論をする場があるという理解でよいか。

運営についての意見も含め、特別委員の方は今回で最後となるのでご意見をお伺いしたい。

○三沢委員

こういう細かい話とは異なるが、こういうものは大きいものと連動しないと駄目だと思っている。例えば現時点で建築家の公募は考えているのか。

○稲村委員長

設計や整備手法などについては、この後に議論する予定になっている。

○三沢委員

そこが大きな部分だと思う。日本には優秀な建築家がたくさんいらっしゃる。横浜は文化を発信する場だと思っている。そういったことが重要になるし、そういうものを共有しどう運営していくのかも。そういったことが施設の持っているブランディング、ステータスとして育っていき、見に行きたいとか、黙っていても人が来る場所になるのではないかな。

○稲村委員長

交流機能以外でも、全体について言い残したことなどがあればご意見をいただきたい。

○宮崎委員

上野委員にお伺いしたい。管理機能や交流機能に関係する部分で、出演者やスタッフの立場で良い劇場だと思った例について、裏側でこういう工夫があった、これがあったから快適に過ごせた、部屋の数とかもあると思うが、こういうスペースがよかった、などあれば教えていただきたい。そういった視点をこの委員会の議論の中で出し、今後の設計などに活かしてもらえたらと思う。

○上野委員

以前に申し上げたことと重複してしまうが、やはり劇場というのはダンサーやアーティストにとってのメゾンという存在であってほしい。例えば、オペラ座の劇場は50年後、100年後も文化財として価値ある存在となっている。そういう存在であると、劇場でただ単に踊るというのではなく、踊って演じながらそこで生きている感覚になれる。稽古場で練習をし、舞台上で踊りお客様と繋がる中で、常に劇場の中で動いているという感覚が欲しい。文化は継承されていくものだと思うので、劇場という場所が時代を超えて、みんなの中で行きたくなる場所、帰りたくなる場所、つい居たくなるメゾン的な場所になってほしい。

レジデントカンパニーに関してはどうなるかわからないと思うが、海外のように稽古場が沢山あって、楽屋がきちんと揃っていて、食事ができるカンティーンもあり、ジムやグリーンルームなど仕事とか暮らしとか、稽古、ひいては寛ぎ、手続きまで全

部済むような、アーティストにとっての居場所になるような場所が欲しい。そういった場所が日本には無いので、そういった場所が実現してほしいという夢がある。

アーティスト、お客様、横浜の近隣の方、日本中の方が来たくなる場所になってほしい。アーティストにとって理想とする舞台や楽屋などの設備もあるが、それ以外にも横浜の立地を生かした設備があるとよい。これまでの県民ホールは、大きなガラス張りのロビーから常に海や公園を望むことができ、とても素敵だったので、新しい劇場でもそれがあればと思う。今はみんなSNSで発信するので、ここで撮った写真を見た人が自分も撮りたくなるような映えスポットを沢山作ることで、世界中、日本中のダンサーやアーティストが来たくなるような魅力が増すのではないかな。

稽古場は常に空や空気と繋がっている場所であってほしい。稽古場が地下にある劇場もあるが、私は上にあるスタジオが好き。オペラ座の屋根裏にはリハーサル室があるが、その屋上が魅力的でダンサー同士が屋上で写真を撮ったりしている。今の時代であればガーデンにしてイベントスペースに使ったり、パーティーができたりハイブランドのイベントができるようなスペースが屋上にあっても素敵ではないかと思う。今の時代と昔からの良き芸術が常に共存してぐるぐるとコネクトし、繋がっている劇場ができたら嬉しい。

レジデントカンパニーは色々な意味で難しいと思うが、日本には劇場に属したバレエやオペラの団体は無いが、劇場に属し、常にそこに居て充実した空間の中で人材が育っていく、パフォーマンスの質も上がって魅力も増す、ということが芸術にとってはとても大切だと思う。

先ほどパイプオルガンの話があったが、パイプオルガンの音は壮大で空間を支配する素敵な音を発する。それを劇場の中では是非維持したいと思っている。みなさんの話を聞きながら、パイプオルガンの音に合わせた新作を作って上演してはどうかなど考えていた。小ホールではなくパブリックスペースに設置するにしても、そこでパフォーマンスができる空間をつくり、オルガンとダンスが融合した作品を創るなどできれば、それも県民ホールにしかできないものになるきっかけにもなるのではないかな。

○大辻委員

以前に県民ホールを見学しに行ったが建物の入り口が2か所あった。一つは1階にあってギャラリーが見えるようになっており、もう一つは2階にあってホールの入り口に繋がっている。入り口とロビーは新しい県民ホールの顔になるので、入って各方面に行きやすくなるように設計してほしいと思っている。

○金田委員

上野委員がおっしゃっていたが、最近はSNSで情報が広がっていく世界なので、誰でも来て写真を撮ることができ、それが映えて、それを見た若者がどんどん来るよ

うな、魅力が広がりやすい設計になるとよいと思う。

私は塾講師をしており、中高生の生徒に県民ホールについて知っているか聞いてみたが、聞いたことあるが場所は分からないとか、そもそも県民ホール自体を知らない子も多かった。山下公園は知っているが、その目の前にある県民ホールは知らない人が結構いるので勿体ないと思った。今議論している内容が実現したら素晴らしい施設にはなと思うが、それがうまく広がっていかない。芸術に携わっている人には良い建物になるかもしれないが、一般県民にとっても誰もが行きたくなる場所になるかというと、感覚的には違うと感じている。

以前県民ホールに行った際一番引かかったのは、すごく入りにくい印象の建物だということだった。その理由として、外との繋がりがうまくいっていないのかもしれないと思った。建物の中に入れば、ロビーから見える外の景色はよいし、よくデザインされた空間になっているが、それは中に入らないと分からない。魅力が外からでも分かるように、階段状のスペースや山下公園との繋がりをうまくデザインできたら、芸術に興味無い人も訪れ、気軽に芸術に触れられる空間になるのではないかと思った。

簡単に言えば、施設の中にスターバックスを入れれば誰でも来る施設になると思う。単純な感覚で申し訳ないが、そのように感じている。

○榊原委員

私は20代の頃に3年間、ベルリンのフィルハーモニー管弦楽団の本拠地で毎日切磋琢磨し常に劇場にいた。その場所は市民の憧れであり、みんなのものであった。つまり市民みんなが使わなくても、みんなが誇りに思える場所であるということが重要だと思う。

これから作るものは、プロが世界中から集まり、日本人が、神奈川県民が切磋琢磨し、良いものを創り上げるという、プロのための劇場をつくるべきだと思う。20年、30年経ったときに、みなさんがその劇場があるということにプライドを感じてくれて、そこで出演したい、展示したい、パフォーマンスしたいという若者が現れてくれる劇場であれば、それがよい劇場だと思う。

○稲村委員長

ホール1、ホール2については具体的な方向性が定まったと思うので、それを踏まえて事務局で議事録をまとめていただきたい。

後半の議論については、方向性というよりは詳細なご指摘や今後検討すべき事項などのご意見をいただいているので、こちらも議事録でまとめながら次の議論に反映していただきたい。

3 閉会

○稲村委員長

以上で本日の議論を終了する。次の委員会は、10月9日（木）に管理運営について議論する予定である。次回も原則どおり委員会を公開としたいと思うが、それでいいか。

○委員各位

（異議なし）

○稲村委員長

それでは、これをもって本日の委員会を終了する。